

海外にある江戸文化

浮世絵ばかりでなく、日本文化のすぐれたものが、たくさん海外に流布し、その実体はごく一部しかわかっていない。しかし、考えてみると、中国を旅行して、美術館や博物館を見歩いて感じることは、発掘による出土品には驚くが、隋唐以来の文化品は、日本にあるもののほうが、はるかに多くすばらしい。その点では、中国文化品が流出したように日本文化品が大量に流出したのは、幕末から明治にかけてのことで、その量は想像を絶するものであるらしい。

東大史料編纂所に斎藤月岑の日記が三十六冊ある。文政十三年から明治八年までの、たいへん詳細な日記である。

西山 松之助

私は学園紛争で研究室へ入れなかった年の夏、二ヵ月余り毎日この日記を読んだ。そうして翌年、東京教育大学文学部紀要『史学研究』（昭和四十四年三月）にその抄録江戸時代の分を載せ、明治の分は『史潮』第一〇六号（同四十四年三月）に「斎藤月岑日記の明治」として載せた。

この日記はたいへん興味深いものだが、原文は、月岑が細筆の草書体で、時に符号などを以て書いているので読み馴れるまでにたいへん日がかかる。しかし、実に面白い。

その「斎藤月岑日記」の第三十三卷明治二年の二月八日のところに、友人の三河屋が、勝川春章の錦絵を本所で買ってきたといって六十五枚贈られた、とある。

このほかにも、月岑自身が出かけて豊春を買ったとか、春信の「吉原美人合」を買ったとか、という記事があるが、当時は、春章の絵が六十五枚も友人から贈られるほど、東京には、江戸の浮世絵がどこにでもたくさんあったらしい。こういう浮世絵を集めて海外へ大量に売捌く專業者もあった。こういうことで、多くの文化品が欧米に流出した。

先年郷家氏が『柴田是眞』の豪華本を出版したが、是眞は「月岑日記」にもしばしば登場する幕末から明治中期の江戸蒔絵の代表者である。郷家氏の豪華本に収録された是眞の代表作が、英・独・仏をはじめ、欧米各地に散在している、その数が多いのに驚いた。氏の話では、まだまだたくさんあるということであった。

先年小学館が、『浮世絵聚錦』という海外にある浮世絵を出版した。この時、私はこの本に載った浮世絵を見て、日本の江戸文化は、国内の史料だけでは、完全な、立派な研究は出来ないと痛感した。というのは、日本には一枚もない浮世絵の名品が、あまりに多く海外にあることを知ったからである。

日本の明治維新による近代国家は江戸を否定して明治新

政府が出来たので、江戸特産であった浮世絵は、新時代の表街道では誠に肩身の狭い日陰の存在になってしまつて、二足三文で、海外に流出したのである。浮世絵だけではなく、蒔絵も、応挙や蕪村や若冲その他の江戸時代に大量に作られた工芸の名品がすべて日陰者になってしまつたので、やたらに流出してしまつたのである。

このような江戸文化の流出品が、印象派の絵に影響を与えたとか、北斎や歌麿・写楽などが、海外で注目されているとか、というようなことによつて、明治の終りから大正の初期にかけて、漱石・藤村・荷風らが、イギリスやフランスで日本文化が大きく評価されているのを見てはじめて、江戸が注目されてくるのである。

柳田国男の民俗学や柳宗悦の民芸の発見もこのような時代の流れにそつて新しい日本観が築かれていったものである。

ところがその後、日本は戦争の連続で、このような海外日本文化の研究は断絶状態になってしまつた。それが、最近陶芸・絵画・工芸などのかなり広い分野で、海外にある日本文化品の調査研究や出版がなされるようになり、欧米の日本文化品コレクターのすばらしいコレクションが相つ

いで日本でその展示会が催されるようになった。これはまことに喜ばしいことである。

こうした潮流のなかで、最近では、海外の美術館や博物館で、欧米の一般人にはほとんど無関心と思われるもの、あるいは、担当者の無理解などによって、今もなおたくさん名品が眠っていることが明らかになってきた。

各分野の研究者のなかで、その第一線で活躍している学者たちは、欧米各地の美術館や博物館に出かけて、最近話題になった北斎の版木をはじめ、奥深く眠っていた名品を続々と発見するようになった。なかでも、浮世絵研究の權威である檜崎宗重氏は、これまでにならぬ調査と真摯な人柄の信頼によって、大英博物館をはじめ、多くの美術館や博物館において未公開の秘蔵品を調査研究することに成功、その結果、まことに驚くべき大量の新発見をされた。

氏の専門が日本美術史で、なかでも特に浮世絵に精通しておられるので、どれが日本には無いものであるのかを、一見して判定され、また、その眞贋の鑑定にもすぐれておられ、八十歳をはるかに越えた氏の大活躍は、まことに刮目すべきものがある。

この檜崎氏の大きな業績の陰には、講談社が、その新発見の名品を是非出版したいという計画があり、それに助けられて、飛躍的に進展したといえよう。したがってこの新しい大きな成果は、やがて、講談社から次々に出版されるので、それは極めて大きな貢献をすることと思われる。

その出版の第一巻が大英博物館の名品で、その名品中の四点について私はその作品の解説を担当した。それは「上野の図」「浅草の図」、菱川師宣の「職人尽図巻」、宮川長春の「江戸風俗図巻」の四点である。

この解説をお引受けしたことは、すこし前からのことと記しておかねばならない。それというのは、このうち、「上野の図」と「浅草の図」はすでに一度見たことがあり、詳細に調査したいと思いつつ、そのままになってしまったといういきさつがあるからである。

一九八五年、東京上野の森美術館と奈良県立美術館における「大英博物館所蔵浮世絵名作展」に、「上野の図」と「浅草の図」が展示されているのを見て私は驚いた。今までの江戸の名所絵や絵巻でも見たことのない建物や風物がたくさん描かれていて、詳しく調べたら、いつ頃に描かれたものかとか、根本中堂の実況とか、浅草寺の有様や沿道

のさまざまなものに、おそらくいろいろの新しい発見がたくさんあるように思われた。

しかし、たいへんな大入りで、私は朝早くに再度行ったが、それでも細かく見ることは不可能であった。図録には、「上野の図」では花見のところ、「浅草の図」では両国橋の賑いのところだけが収録されているだけで、私が興味深く見たのは、むしろ別のところであった。

その解説には、筆者不明だが両図とも同一筆者で、風俗や画技から見て、「享保ごろの成立とみてよいであろう」とあり、絵の内容紹介が少しあって、終りに「元禄享保のころは、版画・肉筆画ならび行われ、師宣・長春・政信・懷月堂・清信あるいは一蝶、未詳の能画などの屏風・画卷・掛幅・画帳に揮毫する肉筆の名作が多く、隅田川ぞい、上野・浅草・吉原に一夜成金・文墨の人を交えた衆庶の遊観を描き伝えている。この両巻またその秀抜な逸品たるを失わない」と結んであった。

この両図は、絵として見ても秀抜な名作と思われるが、江戸文化の視点から見ても魅力的であった。それだけに、この絵は忘れ得ないものになっていた。

ところが今回、さきに述べたようなことで檜崎氏からは

非解説を書くようにとの依頼があつて、私は喜んでそれを御引き上げすることにしたのである。ということでは、「上野の図」と「浅草の図」を中心に述べたいと思うのだが、その前に、師宣と長春の図についても、私なりに面白く感じたところを、思いつくままに述べておきたい。

師宣の「職人尽」には、第一巻に筆結・具足屋・熊野比丘尼・白目立・鍛冶・茶筌壳・紺屋・菓子屋・洗張・友禅・弓師・馬子・駕籠師・猿曳・袴師・太神楽・門付芸人・縫物師・調馬師・薬師・農夫・米搗・本屋・人形師の二四種。第二巻には、鰐師・綿壳・掛掛・帶壳・飴か水菓子壳・研師・酒屋・山伏・歩き巫女・武家大尽・鹿島事觸・錫師・^{不明}塗師・花屋・虚無僧・紙漉・櫛物師・木挽・屋根葺・左官・傘張・魚壳・桶屋・扇屋・本壳・鏡研師の二十八種、合計五十二種の職業が描かれている。

この師宣の「職人尽」は国会図書館に模写本があり、それが、すでに三一書房から出版された『日本庶民生活史料集成』に小沢弘氏の解説によつて収録されている。この模写は安政三年丙辰秋家本武秀によつて、かなり正確に写されているが、原本と比べてみると細部に大きな相違点がある。たとえば、模写本では全くわからないが、師宣の原

本では、筆屋の看板の、大きな筆の図の右肩に「天下一」と明記してある。

この「天下一」看板は、天和二年まで、職人たちが受領すると、筆屋でも菓子屋でも、刀鍛冶、面打その他芸人などまで、「天下一何某」と稱した。そして淨瑠璃の正本とか、能面の裏などにも天下一何某と記し、またそれを看板に掲げたり、劇場の絵看板などにも大きく記した。

ところが、天和二年に、この天下一の文字を看板や板木その他一切禁止の御觸が出た。そして、その御觸には、看板の天下一はすべて削り取れと命じている。そして以後この天下一の文字は、これらの世界から消滅した。しかるに、この「職人尽図巻」には、筆屋にまさしく天下一と看板に記している。したがって、この師宣の「職人尽図巻」は天和二年以前の作ということになる。

またこのなかには、友禅染の工程が描かれていたり、扇屋の骨作り、地紙貼り、商品を売るなどの一連の実況とか、板木彫り、木版摺り、製本、販売などの本屋の工程などが描かれ、新しい江戸の職人風景を描出しているのなどはまことに興味深い。

宮川長春の図は、Ⅰが江戸の正月風景、Ⅱが同じく江戸

の花見風景を描いたもので、これもまことに保存良好の名作である。この作も、その成立年代をかなり限定することが出来た。それは、Ⅰの正月風景のなかに描かれている虚無僧図が、私の所蔵している英一蝶の虚無僧図に酷似していることから、その成立年代を推定することが出来ると私は思う。さてこの英一蝶の虚無僧図は、私が成城大学の在職中に求めたものである。実はこの絵を求めたのは、ふとしたことからで、あまりの嬉しさに、私はそれを大学に携行して、尾形仿・中西進・森岡清美の諸先生や栃尾さんも居られたと思うが、文芸学部講師控室で見ていた。その時尾形さんから、一蝶の翠蓑翁朝湖時代の作というのがいい、絵もなかなかよろしいとほめられた。

宮川長春の「江戸風俗図巻」の成立年代がこの絵から推定されることになったのだが、この絵は、ある日銀座の画廊をつぎつぎに見歩いていたところ、古美術の店があつたので立寄った。そこにこの虚無僧の絵が掛かっていた。

私は家元研究の一環として、普化宗の虚無僧家元社会を研究したことがある。いわゆる虚無僧控書のことや、全国約百近い虚無僧寺のことや、一月寺と鈴法寺が、これらの虚無僧寺を統制していたこと、しかもこの普化宗虚無僧は

武家身分の特権社会で、浪人一時の身すぎをする独特の文化社会であったことなどを追究した。

田村栄太郎は、虚無僧は徳川幕府自身が慶長十九年（一六二四）自家のスパイとして設定したものだとして述べているが、そうではない。三上参次が正確に考証して家康から与えられたと稱する「虚無僧控書」というのは偽書であるこ

とがはっきりしていることから、私は、そのような虚無僧普化宗が、いつ頃から江戸時代の独特な武家浪人の文化社会になったのかを詳細に追究した。

すると、文献上では、延宝五年の法令で、幕府が虚無僧の特権とその根拠としている「虚無僧控書」を「虚無僧作法古來相定之通」という文面で公認したのがはじめてのこ



翠菴翁朝湖書虚無僧図（筆者蔵）

とだとわかった。

これはおそらく、由井正雪や丸橋忠弥そのほか数々の社会不安が続出して浪人問題が渦巻いていた頃、浪人中の虚無僧化していたような集団が、この時とばかり巧みに時勢に便乗して公的存在になったものと思われる。

そうして、後には、本則・会印・通印の三印と、尺八・天蓋・袈裟の三具が一月寺と鈴法寺から授与されることになった。

このような普化尺八の家元制のことは拙著『家元の研究』に詳述したが、虚無僧の天蓋・袈裟などの外形が、いつ頃固定し定形化したかはよくわからなかった。それで私は、いつもこのことに注意しながら虚無僧史料を集めてきた。そのような時に、たまたま、この一蝶の虚無僧に出会ったのである。そして、その絵には「翠蓑翁朝湖書」とあった。

これを見たとなんに、私にはよからぬ事が頭に閃いた。翠蓑翁朝湖が一蝶だと知っているかな、ということである。これも家元研究のプロセスで、馬場文耕の書いた、宝暦七年（一七五七）の『近世江都著聞集』に見える英一蝶のことからのヒントであった。

この本に、「是が絵といはるべきか、其分にしては、家元の家督なるべからず（中略）正風の絵には、いかやうの名人となりても家元の上に立がたしと多年案じて一流の姿を工夫して今一蝶流と云画を書始けり。後英一蝶と云しは此長湖が事也。」と見えており、この文献が、芸能関係の家元に関する「家元」という文字の初見である。

それで私は、長湖時代の一蝶を精査することになり、長湖は朝湖で、翠蓑翁といっていたのは三宅島へ流される前の名だということも知った。そんなことで、この翠蓑翁朝湖というのが一蝶だということをご存知かどうか、と、よからぬことを感じたのである。

ところが店ではよく知って、いろんな説明まで聞かされた。そこで値段を聞いたら六十五万だという。私は高いか安いかわからないが、その虚無僧姿が慙しくて、即刻買求めた。そして嬉しまぎれに諸先生に、自慢たらしくお見せした次第で、皆さんさぞご迷惑だったことであろう。

というようなことで、この虚無僧の絵は、その後私の書棚に収蔵されたままで、誰にも見せたことはない。ところが、今回、檜崎氏が発見された宮川長春の描いた図巻のなかに、私の持っている一蝶の虚無僧と全く同じといってい

いほどそっくりの虚無僧の絵が見つかり、私は早速、この二つの図を比較してみた。

すると、それは私が印象で感じたよりもはるかに酷似していることがわかった。男女二人であること、その二人の姿態がそっくりであること、まず男から述べると、笠をかぶり、尺八を吹いている、その尺八と両手、袖の有様、そして腰から後ろに巻付けた衣裳とそのひだやムーヴマンがそっくりである。女の方は髪形の形から、その髪結び飾りも同じで、両振袖の形、背負い袋を前胸で結んだところ、尺八と両手のこなし、袖口の形から、腰下の後ろへ廻した飾り衣裳などまで、その姿は実によく似ている。

長春のは男の鼻が見えており、背負い袋でなく僧の絡子袈裟をかけた浅葱色小袖が、一蝶のは口だけで、背負袋に黒小袖であるところが違っているのと、女の衣裳の模様が、長春のは赤藍緑の三色花模様だが、一蝶のは、見事な松竹梅である。

さらに驚いたことには、宮川長春の「江戸風俗図巻」の別の絵が、イタリアのジェノヴァ美術館のキョッソーネコレクションで、同じく檜崎氏によって新しく発見され、それにも、衣裳の色目やデザインは別だが、全く同じ姿態の

男女二人の虚無僧が描かれている。

このように、衣裳の色目とデザインが異なるだけで、この二つの長春の虚無僧と一蝶の虚無僧とは、その姿態が全く同じである。これはどのように考えたらいいか、誠に興味深い問題だと思う。

長春が一蝶に倣ったのか、一蝶が長春の原画に倣ったのか、あるいは、全く無関係であるが、当時、このような姿の虚無僧があちこちにいて、たまたま同じような絵になったのか不明だが、私は、二人の画家の間に、何か密接な関係があったと思われる。

したがって、この長春の虚無僧図も、一蝶の虚無僧図と同じ頃、つまり元禄十一年前後に成ったものと思われるのである。

大英博物館の長春の「江戸風俗図巻」の虚無僧は、その虚無僧に、小僧が布施物を差出している。おそらくこのような夫婦虚無僧が正月には、英一蝶の絵のごとく、めでたい松竹梅のような衣裳をつけて尺八を吹き、大道芸としての稼ぎをしたものらしい。

何れにしても、この虚無僧図は興味しんしんたるものがある。師宣の「職人尽」の添景にも見えており、この頃急

に江戸の市井の目につく風景になったからであろうと思われる。

次は「上野の図」である。これは「浅草の図」と同一筆者に違いないが、筆者も年代も全く記されていない。しかし、寛永寺堂塔の建立年代から考えて、享保五年から同六年三月までに描かれたものである。その理由は、享保のこの短期間だけ建っていた仁王門が立派に描かれているからである。

寛永寺ならびに上野辺の歴史に関する権威である寛永寺の浦井正明氏によると、寛永寺の仁王門は、寛永四年に建立されたが、その門を移築したか、既に焼失していたか不明だが、元禄十一年根本中堂建立の時、新しく建立された。しかし、その仁王門は同年九月の勅額火事で焼失、次は享保五年に建立同六年三月に焼失した。その次の仁王門は宝暦年間に建立され、明和九年に焼失した、ということである。

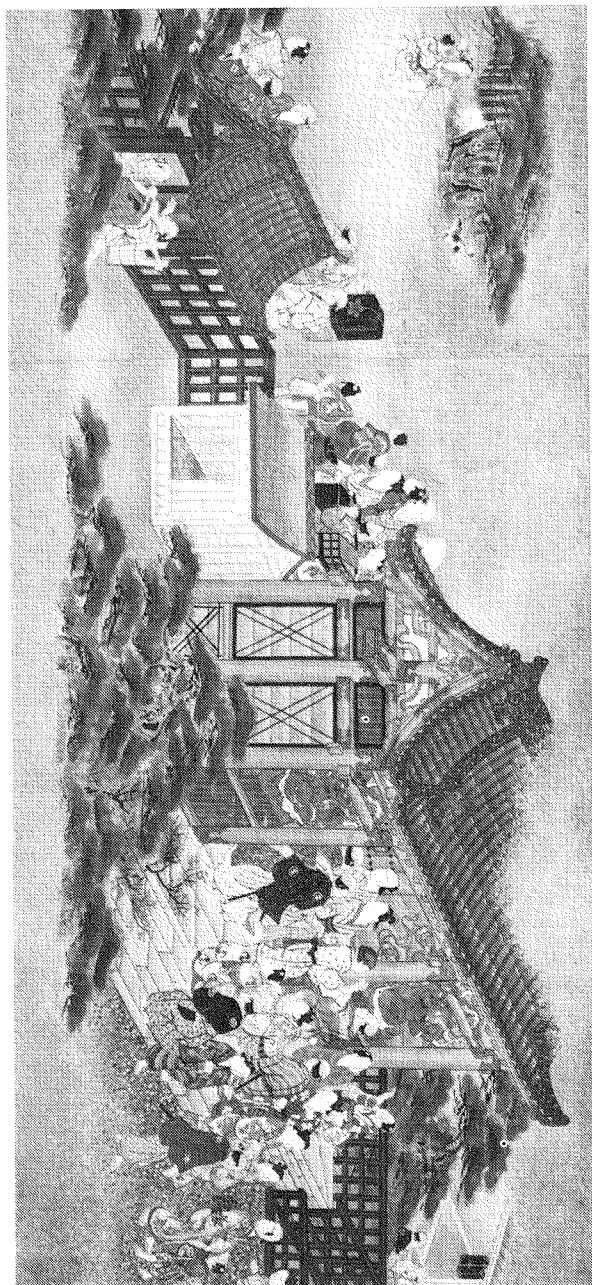
本図に描かれている仁王門は、もし元禄のものであるとすると、本図が桜の季節なので、季節の上から無理である。もしかた、宝暦とすると、桜門文珠楼の手前左方に、本図では、酒宴を催しているが、この辺に享保二十年宝光

堂が建立されたが、それがまだ建っていない。このことから、本図は、享保五年か六年の花見を描いた上野の図であることは確かであり、その意味でまことに貴重である。

つまり、まだ享保改革の暗い時代に入っていない、明るく浮かれた元禄花見の風潮が画面に横溢している。

花見は日本人独特の行動文化で、外国には花見という言葉はどこにもない。日本では、奈良・平安の古代から上層社会で行はれてきた。しかし、一般の庶民たちが桜の花の満開のあたりに幕を張ったり敷物を敷いて、飲み食い歌いさわいで浮かれ遊ぶようになった花見は、元禄ごろから、江戸の上野の山などで盛行するようになったものらしい。そのことは、私の著書『花・『花と日本文化』などに詳説したのでここには省略するが、その元禄の花見の様相が、この図にもそっくり描き出されている。

この図は、上野の広小路から、根本中堂までの上野参詣図である。花見をかねた行楽の参詣で、広小路を騎馬武者が家來を従えて、上野の山へ花見に行くところから始まっている。向う側は酒屋につづいて、さまざまな小鳥を売る店、「ぬいや」、次が盆栽屋、飾置物屋などが並び、花をかざした人たちが行かう風景ならびに、大道で「大神宮」と



「上野の図」の仁王門

書いた御幣を竹竿で高く上げ、笛・太鼓、さららの囃子で大神楽が獅子舞を舞っている。そのまわりに大勢の人がそれを見物している。

次が不忍池から流れ出る忍川に架けられた三橋^{みはし}のところである。『江戸名所図会』には三橋^{みはし}とあるから「みはし」と呼んでいたようである。この辺に花屋や花を賣う人が見える。錫挽屋、餅菓子^{もちこ}の店などがあり、珍しいのは吹矢の店である。江戸時代には、吹矢のことは文献によく出てくる。しかし、それがどのようなものであったのかよくわからなかった。この絵は、その吹矢の図としてまことに珍しい。

間もなく仁王門である。右が口をあいた阿の仁王、左が口をつぐんだ吽の仁王である。これがはじめに述べたように享保五年に建立され翌六年三月に焼失した仁王門である。この仁王門の図は無いそうで、この図は貴重である。

出来たばかりなので、仁王像も真新しい。白黒写真ではよくわからないが、原画はまことにすばらしく、群衆の風俗が千様万態である。とにかくこの仁王門が今見ることの出来る唯一の当時の姿である。浦井氏によると、この図以外に、この兩年の寛永寺を描いた図はないということであ

る。つまりこの図の仁王門は、この図の年代決定の上で貴重であり、同時に、当の仁王門そのものの実体を明らかにしえた点でもかけがえのないものである。

続いて山王神社・清水堂・時の鐘などがあって、そのあたりでの花見風景は見事で花やかに展開されている。進むに従って、いろいろな店があつたり、参詣の人たちのさまざまな様相が珍しく興味深い。

やがて文珠楼という立派な楼門があり、その手前に鐘楼がある。そしてしばらく行くと常行堂となる。この常行堂は渡廊下で同形の法華堂と結ばれていた。この絵では、法華堂の基部だけが見えている。この二つの堂と渡廊下の全体像を見た姿から、これを荷担^{にんとう}堂と呼んでいた。この廊下の下は人々が自由に通行出来た。

ここを進むと右方に雲水塔と呼ばれた多宝塔があり、その基壇だけが描かれている。そして間もなく根本中堂である。この門が勅額門で、靈元天皇宸筆の「瑠璃殿」の額が掛っていた。この勅額門と根本中堂とは、元禄十一年に新しく建造された。その場所は今の噴水の辺である。

寛永寺は天台宗なので、比叡山延暦寺に倣って根本中堂を造営、これで寺の建築が完成し、彰義隊の戦災で焼失す

るまでその偉容を誇った。

元禄の完成に当り、比叡山延暦寺の中堂前に、その昔慈覺大師が入唐の節、五台山から根ごしの竹を持帰って植えた竹というのを根分けして、この寛永寺根本中堂の前に植えた。それが竹台たけのだいと呼ばれる左右の竹で、向って右の竹がよく茂っているのが描かれている。ちょうど植えられてから二十二、三年に当る。この竹台たけのだいは地名だけが今も伝わっている。この中堂周辺にも桜が植えられており、その桜の下を大勢の人たちが参詣している。

「上野の図」は以上の如くだが、「浅草の図」も享保五、六年の作でまことに秀れた極彩色の参詣図である。そして、当時の最もオーソドックスなその参道、すなわち両国から天王町などの蔵前・駒形堂・雷門という沿道を精細に描いている。

両国橋はたいへん賑わっており、隅田川の屋形船も、二階座敷の豪華船などを描いているのは珍しい。浅草御門が、門に向って横から入り、直角に左へ曲って浅草橋を渡った実体が正確に描かれている。そうして橋の欄干の両端にある橋柱には立派な擬宝珠がある。

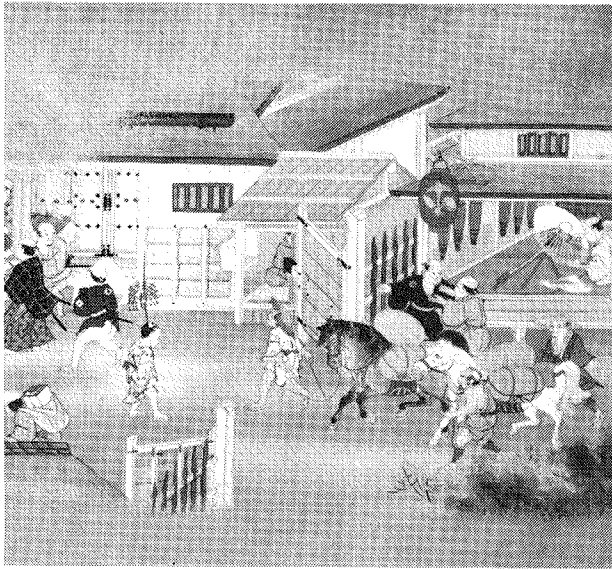
続いて、履物・編笠・たばこなどの店で、店の主はたば

こを刻んでいる。馬で参詣の上流婦人、茄子売り、そして下り傘や下り草履などを売る店、竹細工店と続いている。

この辺から幕府の米蔵が右側に続いているので、その観音開きの木の大門が見え、附近に、そこへ出入する侍やその馬と馬子が描かれている。

続いて開かれている木戸がある。やがて橋が見える。これは天王町から片町へ架けられた小さな橋で、その橋の向うに船着場があり、仲仕が船から歩み板を渡って米俵を陸揚げして左の方に積上げている。その左では一頭の馬に両側へ一俵ずつ、その上へもう一俵積み載せようとしており、その左には、一人で米俵を二俵背負って行こうとする男がいる。また、もうすこし進んで行ったところにも、米俵を三俵ずつ積載せた馬が二頭描かれている。これらの風景は、当時の江戸の札差の米店から小売店へ米を運んで行く最も普通の方法だったようである。

御米蔵の側には、享保元年の地図には、店は記されていない。しかし、この享保五、六年の本図には、かなりの店が描かれている。子供の菓子屋・兜屋・きせる屋・傘張りなどが並んでおり、大きな赤提灯の傘張看板は興味深い。その左には、さきの木戸と同様の木戸があり、向う側には



「浅草の図」木戸と木戸番

木戸番小屋があつて、中に木戸番が坐っている。そのすぐ左は御米蔵の門の大きな立派な扉の一部が見えている。享保の木戸と木戸番は珍しいものである。

造花屋・餅屋・笠や傘の店などが並び、「白ミそ」と書いて

た大きな重ね箱を背負て行く味噌売り、点茶の店、「まつや」と染抜いた暖簾のかかっている蕎麦屋がある。

駒形堂は後には、この参詣道の方を正面に建っているが、この図では隅田川から入江になっているその入江に向つて建っている。

駒形堂の隣が魚屋で、これから並木町となる。一杯飲み屋の酒店の次は、稲荷の朱塗の小鳥居を売る店、そこにも同じような木戸がある。島台屋・竿屋などが並び、陶器漆器の店、魚、野菜の振売り、そして「こきりこ」を投上げて手品曲芸を見せている大道芸人が人を集めている。

その左向うは料亭である。二階では大盃で酒を飲む人、尺八を吹く人などの客四人、給仕女一人。下では、薦被り四斗樽から酒を出す人、大組で魚を料理しているのなどが見える。その隣の角店は、高砂の松と翁・媼を白染抜にした暖簾を掛廻し、店先の朱塗箱に高砂やと記してある。男は食物を作り、女は酒の燗をしているのであろう。燗徳利が並び、道路では二人の客引男が、しきりに呼入れをしているから、これも一盃飲の料亭だろう。

江戸の料亭は、明和からとされてきたが、宝暦には浅草に二百人近い客を大広間で饗する大料亭が出来ていた。本

図は享保五、六年なので、さらに四十年程前である。

いよいよ浅草寺で最初の門は、俗に雷門と呼んでいるが、正しくは風雷神門で、向って右が青の風神、左が赤の雷神である。門のあたりに貴人たちの駕籠が下山を待っている。

浮世絵の雷門には大提灯がよく描かれているが、この雷門にはそれが見えない。というのは、雷門は明和四年の江戸大火で焼失、寛政七年三月十八日に再建完成、この時はじめてこの雷門に大提灯が家根屋三左衛門・御高盛講中によつて寄進されたからである。

雷門を入ると、楼門までの左右に、六院ずつ子院が建並んでいた。享保元年の地図では門を入つてすぐ右が知光院、続いて正福院・法^{不明}□院・寿命院・長寿院・善仁院、左が日音院・寿光院・金蔵院・月照院・法蔵院・梅園院と六院が記されている。

本図は右側を描いてあるので、知光院から順々に子院の門と門前の有様^{不明}が描かれている。知光院は鹿島社、正福院は秋葉社、法^{不明}□院は後円乗院となるが、ここは弁才天、寿命院は妙見社、長寿院は大黒天、善仁院後の正智院には涅槃堂、左側の子院も、雷門から順に日音院の大神宮をはじめ

め、次が松尾社と金比羅宮、不動尊、弁才天、石尊大権現、そして梅園院には仁王尊というように、それぞれ堂舎が設けられ、大名や町人の檀家を持っていた。

この図は、これら子院の門前町が出来はじめた頃の様子を写したもので、門前町より子院のほうが主体であることを如実に示しており、各子院の門前に小さな小屋掛の店が一軒ずつ笛屋とか茶店などが描かれているだけである。

参詣道のこちら側には、大きな松の木や、浅草寺客殿としての伝法院の立派な門が見えている。やがて仁王門と呼ばれている楼門である。その仁王門の右前に「覗^{のぞ}からくり」がかかっている。四角の大きな箱屋の正面上に絵馬額のような看板をかけ、正面の三つの覗き穴の二つは見ている人、一つが空いている。天井に当たるところは、最高部より少し下のあたりで、明り取りのため白和紙が張つてあり、その天井の上に中心柱の廻りに、騎馬人形が飾つてある。あるいはこれも廻る仕掛けになっているのかもしれない。

「覗からくり」は、その絵の絵解きが、面白おかしく、時には物悲しい語り口で見る人を感動させるのだが、向って右側面に白い笠をかぶって細紐を何本も持っているの

が、その絵解きである。この人は、語り終ると、その紐を操って次の場面に移ってゆくのである。

この絵解きが何本も細紐を操っているのは、あるいは、中の見せ絵が人形とか、かなり複雑なからくりものになっていたことを物語っているのかもしれない。何れにしても「覗からくり」が、このように詳細に描かれているのはま



「浅草の図」仁王門前の覗きからくり

ことに珍しい。

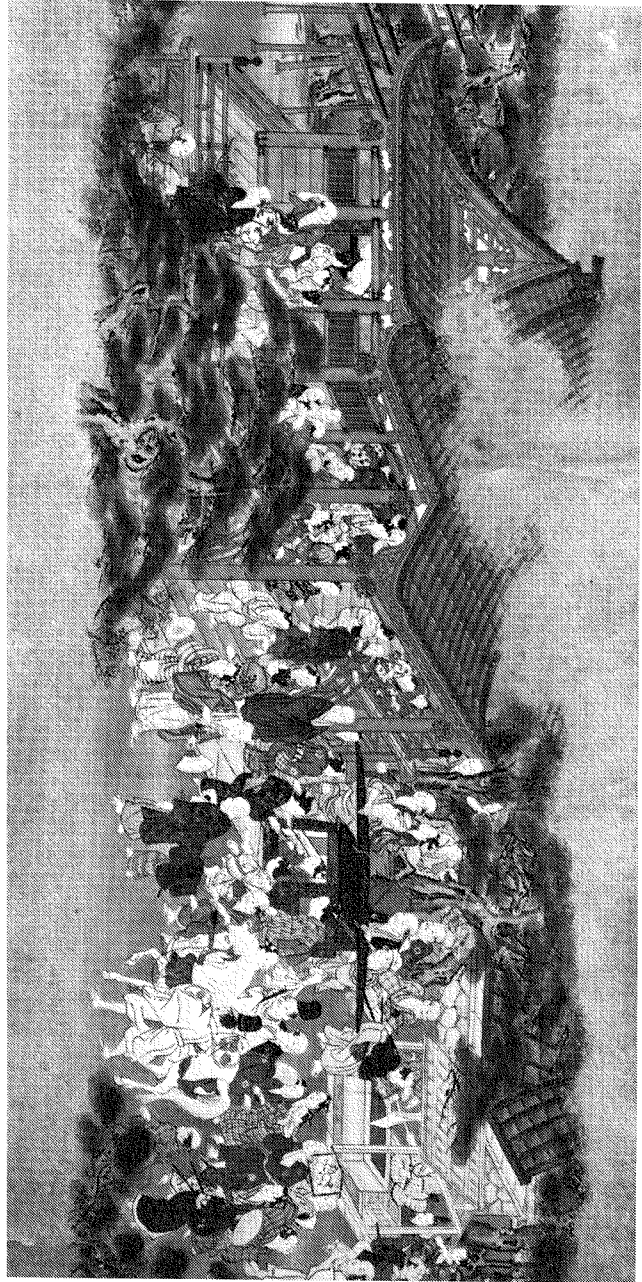
仁王門を通過すると、茶筌を並べ、茶を挽いている店があり、その向うに、五重の塔の基壇と第一層の屋根の一部が見える。現在は本堂に向って左に五重塔は建っているが、昔は反対側に建っていた。

しばらく行くと右手に手洗場があり、その向うに鐘楼の基壇だけが見えている。いよいよ浅草寺の本堂である。

雷門から本堂まで、建物の場所以外はまだ、石が敷いていない。本堂は高いので、一段目は石敷で、それからは木の段になっている。ただし側面は石段である。これは、正面が御拜^{ごはい}の屋根の下で雨に濡れなかったからではないかと思われる。

多くの人たちが参詣している。仁王門にも本堂正面にも、まだ、大提灯は見えない。しかし、本堂の向って左の出口の上部に、かなり大きな提灯が二つ、その下部だけが見えている。おそらくこの大提灯は信者の奉納したものであろう。

雷門の大提灯は寛政七年の奉納で、これが浅草寺大提灯の最初とされてきたけれども、本図によって、すでに享保



「浅草の図」 浅草寺本堂

五、六年頃に、本堂内陣へ大提灯が奉納されていたことが明らかである。したがって、雷門の大提灯奉納はこのような先蹤に倣ったものだということになる。本図はこのような点でも貴重である。

本堂裏には朱の鳥居が建並び、その向うに社殿の一部が見えているのは熊谷稲荷社である。江戸時代には、この稲荷社もたいへん栄えた。

「浅草の図」は以上の如くである。このように、「上野の図」、「浅草の図」を見てきたが、両図とも、当時の巨大な松の木がたくさん描かれているのに驚く。

このような「上野の図」、「浅草の図」は、ただ、はじめの解説にあるように、当時の風潮としての一夜成金や文墨の人たちの遊飲の有様を興味深く描いたものであろうか。私はもつと別の深い作画動機があったと考えている。

それは、「上野の図」は花見風景とはいえ、寛永寺根本中堂への参詣が主題となっており、同様に、「浅草の図」は、観音様への参詣が主題である。すべてはこの道筋だけで統一され、上野にも浅草にも多くの名所があるけれども、それには一切ふれていない。ひたすら参詣にしばらくしている。

つぎに考えられるのは、「上野の図」では仁王門が新築されたので、それを記念にという発想が強く存在したと考えられる。そして「浅草の図」では、享保四年の三月十八日から浅草寺順年開帳が盛大に行なわれ、翌享保五年から浅草寺の十万人講がはじまり、それが年毎に盛んになった。そこでその参詣の盛況を描いたと考えられる。

もう一つ考えられることは、享保五年という年が、有名な江戸の六地藏結願完成の年だということである。地藏坊正元という深川の僧は、衆生済度のため、江戸市民を勧化して宝永五年（一七〇八）品川の品川寺ほんせんじに丈六金銅の見事な地藏像を完成した。これが一番。ついで宝永七年二番を東浅川の東禅寺、三番正徳二年新宿太宗寺、四番正徳四年巢鴨眞性寺、五番享保二年深川靈巖寺、六番享保五年深川永代寺と全く同形のすばらしい地藏を完成した。今永代寺の地藏は無いが、他はすべて残っている。

この大事業は、寄進者名簿と金銅像に彫込まれた寄進者名で、何れも何万人もの淨財で出来たことが明らかである。巨大かつ見事な金銅地藏六体が、一人の勸化僧地藏坊正元により、二年か三年毎に完成され、それがすべて市民の淨財であつた。

この大事業を成就した聖僧正元はその六体を完成した後、忽焉として江戸から姿を消してしまった。

当時の江戸の人たちは、ただ浮かれ遊んでいただけではない。一勸化僧正元が呼びかけた衆生済度の発願に、忽ち数万の信者が毎回結集した、その生々しい信仰の象徴六地藏のうち五体は今も立派に、そのまま伝わっている。私はこの五体の地藏尊を詳細に調査した。その実感から、この「上野の図」「浅草の図」を見ると、なかには六地藏を造立した人たちが交っていて、何れも晴着を着て参詣している図であって、当時の信仰の具現であると考えたいのである。

以上のごとく、このようなことがわかってきたのは、海外における日本の文化品が、すぐれた人たちによって、次々と新しく発掘・発見されたことによるものである。しかし、これらはまだ、ごく限られた分野でしかない。今後さらに広汎な分野にわたってこのような研究を進めたいものだと思っている。